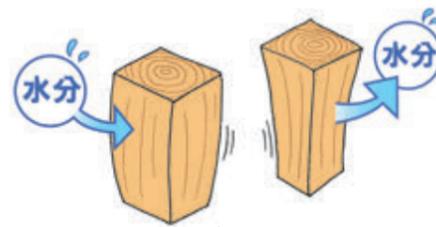


東京の林業について知ろう

●木材には私たちの暮らしに良いことがたくさんあります

木材には、コンクリートや鉄などほかの素材と比べ湿度や温度をある程度一定に保つ効果があるとされています。

木材には種類によってさまざまな香りがあり、人をリラックスさせる効果や、桜など広葉樹の木材の煙で燻すことで燻製など食材をよりおいしくさせることもできます。焚火や炭火の炎やその香りに、癒しを感じたりしませんか。



木材は湿度を調整します

●木材を上手に使うための工夫があります

木材は、乾燥することで形が変わったり、木によって質がまちまちであるなどの扱いにくいところもあります。しかし加工する前に木材を十分に乾燥させることで変形を防いだり、様々な板を張り合わせる（CLTなど）などの工夫により高層建築物にも使えるようになってきています。



CLT



木材をよく乾かす（天然乾燥）

●東京の多摩地域で生育、生産された「東京の木 多摩産材」が身近にも使われるようになってきています。



プランターカバー



屋外ベンチ・テーブル



木塀



住宅



保育園



小学校

発行：東京都産業労働局農林水産部森林課 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号 電話 03-5000-7200

制作：シーアンドゼットコミュニケーション株式会社

登録番号(05)200

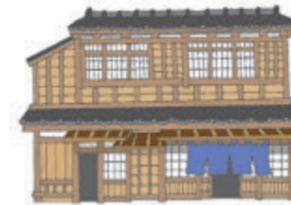
印刷：能登印刷株式会社

この紙は、東京の木25%、古紙75%を配合した東京の木の紙です。

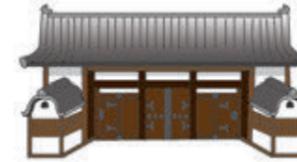


●江戸時代の林業

江戸時代、東京は約100万人が住む町でした。青梅林業地のスギやヒノキは家、神社、寺、大名屋敷などの材料になりました。檜原村などでは燃料の薪や炭作りが盛んで、炊事や暖房に使われました。練馬区・世田谷区・高井戸の辺りは四谷林業地と呼ばれスギ丸太を江戸に供給しました。



クヌギやコナラを炭や薪にしました



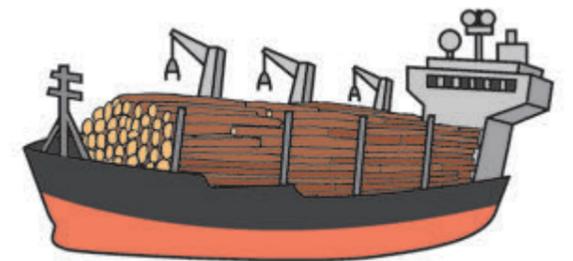
スギやヒノキ

●戦後の林業



戦後の経済発展のために

建築材などの木材がたくさん必要になり、東京でも多摩地域を中心に昭和30～40年代にたくさんのスギやヒノキを植えました。



昭和40年代、植えた木がまだ大きくなっていないため外国から丸太や角材が大量に輸入されました。外国の木材との競争により、国内の木材価格が下がりました。



木材を売る林業の経営は苦しくなり、手入れがされず荒れている森が増えました。



電柱やへい家などが木ではなくコンクリートや鉄などに置きかわるなど木材が使われなくなりました。

●森の手入れは、どのように行うのでしょうか



質の良い木材をつくるため、不要な枝を切り落とします。
はしごなどを使って木に登ります。

枝打ち



木の成長に邪魔なつるや曲った木などを取り除きます。
枝が多くあるので林内を歩きまわるのも大変です。

つる切り・除伐



苗木の周りに生えた雑草を刈り取ります。
木陰がないなかで、夏場の作業なので、暑くて大変です。
間違えて苗木を切らないよう注意します。

下刈



伐採が終わったら、苗木がよく育つように下草や太い枝などを片付けてから、苗木を植えていきます。

植え付け



森林の中まで光が届くように、間引きします。
将来の森林の姿を考えながら、伐採する木を選びます。
伐採する木が、残す木にぶつからないよう、倒す方向を慎重に決めます。

間伐



十分に成長した木を収穫します。
大きく太い木を伐り倒すので、細心の注意が必要です。

主伐



●多摩地域の森林の約6割は、平均傾斜が35度以上です。
地面に手をつきながらでないと登れないと感じるほど急な斜面です。

●手入れ作業に必要な費用は、木材を売ったお金を使います。

●木が大きくなるまでに、1haあたり180人・日以上の労力がかかります。
木を収穫するために、さらに多くの労力がかかります。

東京都にも林業が必要です

- 東京都の面積の約4割は森林で、その多くが多摩地域の西部に存在しており、下流の地域に対して、水源かん養、洪水調整、土砂流出防止など様々な機能を果たしています。
- 森林がその様々な機能を十分に発揮し続けるためには、森林を適切に管理することが必要で、それを担える技術を持った人たち(林業技術者)が必要です。
- そうした人たちが、林業技術者として生活していくためには、産業としての林業が必要です。
- 大都市とはいえ、東京都にも林業が必要なのです。